

第8章 後呂遺跡及び山梨県内の古墳に伴う犠牲馬

後呂遺跡の調査で、「第1号古墳」と名づけた古墳が1基検出された。現状は畠地で、後世の削平を受けたために墳丘が消滅てしまっているが、周溝と思われる弧を描く溝とその内側に葺石と思われる礫群を伴うことから古墳と認定したものである。古墳の規模は周溝のプランから10m前後と推定され、それほど大きくない小円墳と考えられる。主体部は調査区外で、遺物も出土していないことから時期不明の古墳といわざるを得ないが、近くに墳丘が残る左エ門塚・右エ門塚といった後期古墳と思われる古墳が点在することから、本古墳も後期に属するのではないかと考えている。

さて、このような古墳の南東部を中心に周溝や墳丘部から「馬歯」が出土した。エナメル質に保護されて腐食せずに幸運にも残存したものである。第86図に示すとおり、周溝の上層を中心に7点、墳丘部の葺石と思われる礫の周囲から12点が出土した。本遺構は墳丘が削平された古墳であり、散乱した分布状況は、削平された時に散らばってしまったものだろう。歯の部位は、ほとんどが不明なほどの状態で出土しており、当初に馬をどのような状態で埋葬したのか解明するのは難しい。

古墳に伴って馬が出土するということは、大陸で見られる殉葬が行われていた可能性が高い。これまで日本では、馬の殉殺については、孝徳紀大化2年(646)の条に「大化薄葬令」といわれる詔があり、その中で馬の殉死を禁止することが記されている。このことから、当時そのような風習があったことは推測されていたものの、これまで学会では過小評価されがちであったが、近年の事例報告や研究の積み重ねにより、馬を用いた犠牲行為があったことは考古学からも証明されつつある。そのあたりの研究史や全国の事例集成は、桃崎祐輔氏の論考(註1)に詳しい。

山梨県内で馬歯・馬骨が出土した古墳・周溝墓は、後呂遺跡の出土例を合わせると6例である。ただし、双葉町二ツ塚1号墳のように後世に馬捨て場として利用されたため、古墳の周りから馬骨が出土する例があり(註2)、その地が以前どのように使われていたかという地域の伝承にも注意を有する。

①東山北遺跡(註3)：中道町下向山に所在。東西36m、南北31.4mを測り、4世紀後葉に比定される2号方形周溝墓の周溝内から馬歯・馬骨が出土した。興味深いのは、馬歯・馬骨とともに鉄鎌も発見されていることである。各地の古墳から出土する馬形埴輪に伴う人物埴輪の多くが鎌を所持しているが、これは飼い糞を刈る道具と推定されており、馬曳きが常に鎌を所持していたらしいことからも馬とのセット関係がうかがえ、また、しばしば馬や鎌が古墳や周溝墓から出土するが、これらは異界をめぐる呪術に使われたことも考えられるという(註4)。

②塩部遺跡(註5)：甲府市塩部2丁目に所在。長辺20m、短辺12mを測り、4世紀後葉に比定される3号方形周溝墓の周溝から馬歯が出土した。本例にしても、東山北遺跡例にしても4世紀の後葉であり、日本でこれまでに確認された馬の中でも最古級であり、古墳時代の日本国内の中で甲斐国はいち早く馬を導入したことがわかる。馬の飼育は高度な技術が必要であり、馬飼育の技術者(集団)を受け入れていたことが考えられる。このように、古墳時代の前期という国内の馬導入の初期段階から甲斐と馬とを結び付ける歴史的下地があって、後に甲斐国は「黒駒の産地」として知られ、聖徳太子が「甲斐の黒駒」に乗って天上をかけながら富士山と大和を往復した伝説などが生み出されていったのだろう。

③姥塚無名1号墳(註6)：東八代郡御坂町井之上・二之宮に所在し、6世紀中葉以降に比定される径6mの円墳の周溝から馬歯が出土した。

④横根39号墳(註7)：甲府市横根町に所在し、6世紀末から7世紀初頭にかけての時期に比定される径11mの積石塚古墳(円墳)の横穴式石室から1頭分の馬歯が出土した。

⑤蝙蝠塚古墳(註8)：東八代郡八代町に所在し、古墳の規模等は不明であるが、6～7世紀に比定される円墳の横穴式石室から馬骨が出土した。出土状況は14体の北頭位人骨が4体ずつ3通りに並び、人骨の足部に2頭の馬骨が北に向かい、相対して臥し、口辺に轡が1個あったという。

⑥後呂遺跡：第6章第4節 第1号古墳の項参照

このように曾根丘陵上や甲府盆地内に古墳時代の馬の痕跡が見られ、各地の首長層が馬を保有していたことがうかがえる。桃崎氏によれば、馬は騎馬兵力、輸送手段、耕作等に使われた貴重な労働力であるはずなのに、後呂遺跡例でもわかるようにそれほど大きな古墳ではなく、小円墳でありながらあえて殺して殉葬ができるような立場の被葬者の性格として、馬生産や流通に関与していた可能性が高いという(註1)。

後呂遺跡は曾根丘陵上に立地するが、曾根丘陵と馬を結び付けるものとして、中道町の東山古墳群においては、かんかん塚(茶塚)古墳から県内最古の5世紀後半の鎧などの馬具が出土するのをはじめ、いくつかの古墳の石室から6世紀以降の馬具が出土している。また、中道町に隣接する豊富村では、当村から出土したと伝えられる5世紀後半のf字形鏡板付轡が東京国立博物館に残されている(註9)。時代は少し下るが、三珠町上野原遺跡から発見された奈良時代の土師器蓋に馬の後脚と尾が刻まれているものが見つかるなど(註10)、曾根丘陵と馬との関わりは深く、曾根丘陵周辺の首長たちが馬飼育を行っていたことは確実で、大切な労働力の馬を殺してまで儀礼行為を行うことの意義は、来世においても被葬者につかえるようにとの願いがこめられているのだろう。

後呂遺跡で見つかった馬は、歯の咬耗度が低いことから老齢馬ではなさそうなので、労役の最盛期が過ぎた馬を使ったのではなく、労役にも繁殖にも十分期待できる弱年齢の馬が使われたようだ。そのような馬をあえて犠牲に使うことに意味があったのだろう。残念ながら今回、後呂遺跡で見つかった馬歯の出土状況が良いとはいはず、儀礼のプロセスの復元まで行うことができなかった。とはいものの、古墳から馬歯が出土した意義は大きいことに変わりはなく、曾根丘陵周辺の首長層における馬飼育の一側面をうかがうことができる発見ではなかっただろうか。

(岡野秀典)

＜引用・参考文献＞

- (註1)桃崎祐輔 1993 「古墳に伴う牛馬供犠の検討－日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して－」『古文化談義』第31集 九州古文化研究会
- (註2)末木 健 1978 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－北巨摩郡双葉町地内－』山梨県教育委員会他
- (註3)末木 健他 1993 『東山北遺跡』 山梨県教育委員会
- (註4)坂本和俊 1997 「河童・駒・鎌・竈－考古学的に見た河童駒引きの周辺－」『祭祀考古学』創刊号 祭祀考古学会
- (註5)小野正文他 1996 『塩部遺跡』 山梨県教育委員会
- (註6)末木 健他 1987 『姥塚遺跡・姥塚無名墳』 山梨県教育委員会
- (註7)信藤祐仁他 1991 『横根・桜井積石塚古墳群調査報告書』 甲府市教育委員会他
- (註8)山本寿々雄 1968 「第5章第2節1古墳」『山梨県の考古学』郷土考古学叢書5 吉川弘文館
- (註9)坂本美夫 1998 「甲斐における部民制の成立とその態様－伝豊富村出土F字形鏡板付轡を中心として－」『山梨県史研究』第6号 山梨県
- (註10)末木 健 1999 「第2部第6章(2)馬」『山梨県史』資料編2 山梨県